

ミステリ読書案内

2024. 7. 29 発行元

第593号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

大山誠一郎「にわか名探偵」

5月に光文社から大山誠一郎の『にわか名探偵』が出た。『ワトソンカシリーズ』の二冊目になる。事件が起きると、自分の周りにいる人たちの「推理力」が急激に上昇するというユニークな設定が読みどころ。

大山誠一郎・ミステリ著作

1. アルファベット・パズラーズ
2. 仮面幻双曲
3. 密室蒐集家
4. 赤い博物館
5. アリバイ崩し承ります
6. ワトソンカ
7. 記憶の中の誘拐 赤い博物館
8. 時計屋探偵の冒険
9. にわか名探偵 ワトソンカ

「本格謎解き」路線の探求

大山誠一郎の作品リストを右上に載せておいた。どの作品も「本格もの・謎解き・パズラー」の路線に沿ったものである。デビュー20年で10冊足らずの作品数なので決して多いとは言えない。それだけに出版された本は貴重で、丁寧に読まなければならない。

今回出たのは『ワトソンカ』の続編。雑誌『ジャーロ』などに掲載された作品に書下ろしを加えて七編の構成になっている。

「ワトソンカ」とは？

『ワトソンカ』というのは大山による造語。話の中心に位置しているのは警視庁捜査一課の刑事・和戸宋志。でも彼の推理能力そのものはそれほどではない。ポイントは、彼の周りにいる事件現場に居合わせた関係者の推理力が急に高まり、和戸が推理しなくても周りがどんどん犯人を追い詰めていく形になる。

和戸の役割りはホームズに対す

るワトソンの役割り。周りの人を名探偵にしてくれる。その影響力がどれくらいの範囲に及ぶのかも今回のテーマになっている。和戸の5メートルは確実。果たして10メートル、20メートルではどうだろうか。本書の中には互いにすれ違うロープウェイの二つの籠どおしという設定も出てきている。

自分では何も推理ができないのにチームとしては100%の事件解決という結果。本人の内心の思いは…どんなものだろうか。

映画館の中での密室

第一話の『屍人たちへの挽歌』は映画館での密室殺人。和戸は片瀬つぐみと一緒に映画館へゾンビ映画を見に行く。平日の朝一番の回なので観客はまばら。映写が終わった時ドアに鉄の棒が通してあり、なおかつ接着剤でかためてあった。業者が来て開けられるようになるまで待つことになり席に戻ると、そこには女性の客の死体が…。

密室はいつ構成されたのか。鉄の

棒はどうやって持ち込まれたか。犯人はこの場に残されている人達の中に存在するのか…。『ワトソンカ』が発揮され、それぞれの人物が推理を述べ始める。このロジックの積み重ねがこの作品の魅力。

ユーモアたっぷりな…

第二話は『ニッポンカチコミの謎』。たまたま夜の街を歩いていた和戸はひょんなことから任侠団体事務所に引き込まれる。そこで物置から男の死体が…。防弾チョッキに拳銃というカチコミの姿で…。その組長はエラリー・クイーンの名探偵が大好きで、たちまちに推理合戦が開始される。

こういうユーモアたっぷりなのが本作品の特徴。「感涙・慟哭…」などという方向に進まないあっさりさが大山ミステリの良いところ。私はそこが好きだ。

小路幸也「失踪人 磯貝探偵事務所ケースC」

5月に光文社から出た

本。雑誌『小説宝石』に連載された後単行本になったもの。『〈銀の鯨〉の御挨拶』『〈磯貝探偵事務所〉からの御挨拶』に続く第三弾。元刑事で札幌で探偵事務所を開いている磯貝公太が話を進める。

ハードボイルドの定型である失踪人を探す依頼からスタートする。もっとも本シリーズはハードボイルド色はそれほど強くない。前作からの流れで〈鯨〉を運営している青河文とその甥の桂沢光などの協力を得て、探偵事務所の活動もなんとか順調に…。文の知人の高名俳優から行方不明になっている姉を探してほしいと頼まれる。姉は北海道知事の特別秘書をしていたのだが、突然姿を消したという。家族への連絡がないままで、秘書の仕事も急に退職し、住居からも引っ越したようだ。磯貝は転居先を探そうとしたが難しかった。その後、知事とも会って仕事をしている中での原因を探ってみたのだが、こちらも前進できないまま…。父親とも話をし、友人関係をたどって…。後半は思いもしない方向に話が展開していく。裏に隠されているのは過去の大きかりな…。小路作品はとても読みやすい。読み手に優しい文章なのですすいと物語の中に入り込めるのが有難い。事件に関わっている人達の人物像もしっかり作り上げられていること、そして会話がしっかり交わされていることが伝わってくる。ミステリとしての「意外性」も本作ではしっかりと出せている。